

高校生における陸上競技の継続および非継続に係る要因

渡邊將司¹⁾ 明珍直樹²⁾ 上地 勝¹⁾ 久保佳彦³⁾ 森丘保典⁴⁾ 三宅 聡⁵⁾ 繁田 進⁶⁾
尾縣 貢^{5,7)}

- 1) 茨城大学教育学部 2) 茨城県立伊奈高等学校 3) 茨城県高等学校体育連盟
4) 日本大学スポーツ科学部 5) 日本陸上競技連盟 6) 東京学芸大学教育学部
7) 筑波大学体育系

Factors for high school athlete continuance or quitting track and field activities

Masashi Watanabe¹⁾ Naoki Myoutin²⁾ Masaru Ueji¹⁾ Yoshihiko Kubo³⁾
Yasunori Morioka⁴⁾ Satoshi Miyake⁵⁾ Susumu Shigeta⁶⁾ Mitsugi Ogata^{5),7)}

- 1) College of Education, Ibaraki University
2) Ina High School
3) Ibaraki High School Athletic Federation
4) College of Sports Sciences, Nihon University
5) Japan Association of Athletics Federation
6) Faculty of Education, Tokyo Gakugei University
7) Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

Abstract

This study of second-year high school students was conducted to elucidate factors for continuance and non-continuance of track and field activities. This questionnaire survey was designed to elicit their factors for continuance and non-continuance of extracurricular activities. Of high school student questionnaire recipients (19,843), 82% responded. Among respondents, we chose 633 students who had been track and field club members in junior high school. Analysis results show that students who had continued track and field participation tended to show strong ambition and positive feelings for track and field activities, also showing high performance, active support by family, and relative age effects during the junior high school period. Students who changed to other activities tended to feel attracted to other sports. Many such students had been invited to other activities by older students or friends. They felt they had limited ability to participate in track and field activities. Among female respondents, practice sessions were often reported as difficult. Whether track and field or not, students who quit extracurricular activities tended to feel not only friction among teammates but also feelings of limited ability and difficulty from incompatibility with studies. Students who quit extracurricular activities when entering high school tended to feel less interested in joining extracurricular activities. They were satisfied with sufficient accomplishments during junior high school and felt attracted to other activities such as part-time jobs.

I 緒言

笹川スポーツ財団(2015)によると、学校の運動部(以下、運動部活動)またはスポーツクラブに所属している者は、小学生で72.0%、中学生で74.5%、高校生で51.2%と報告している。このよ

うに、部活動やスポーツクラブの継続が中学校から高校にかけて減少することがわかる。

高校まで運動習慣を継続することは将来の健康と関連する。中学・高校と運動部活動またはスポーツクラブ活動の経験がある者は、経験なしまたは中学のみの者と比較して、20歳以降で高い体力・運動

能力を有している（文部科学省 2010）。特に 50 歳以上では、経験なし群と中学のみ群の体力・運動能力は同程度になるので、中高齢期まで高い体力を維持するためには、少なくとも高校まで運動習慣を継続することが重要である。

運動部活動の継続・非継続に関する研究はいくつか報告がある。青木（1989）は、高校生を対象にして運動部活動の継続と途中退部に関する質問紙調査を実施した。その結果、高校生の運動部活動の途中退部の理由として、「人間関係のあつれき」、「他にしたいものがある」、「勉強との両立」（男子のみ）、「けが」（女子のみ）を示していた。また、継続には、「厳しさ」、「レギュラー状況」、「指導者への満足度」、「感動経験」が強く影響していることを明らかにした。池上（2005）も、高校での運動部活動の継続に関して調査した。継続理由として、「仲の良い先輩や友達がいる」、「そのクラブの活動が盛ん」、「強いから」、非継続理由として、「帰りが遅くなる」、「やりたい種目がないから」、「練習が厳しいから」の順に多いことを明らかにした。つまり、継続者は先輩や友達との交友面や所属する部活動の活発な活動に引かれ、非継続者は運動部活動後の帰宅時間が遅くなるという生活時間的な側面と多様なスポーツ種目に関わりたいという欲求に運動部の組織や実態が合っていない可能性があることを示している。横田（2002）は、高校 1 年の 11 月時点で運動部活動に所属していた者を対象にして、6 か月毎に合計 4 回のスポーツ参加動機とバーンアウトに関する質問紙調査を実施した。その結果、途中退部した者は継続者と比較して、初回の調査よりも「向上心・意欲」と「練習に対する成就感」に関する得点が有意に低く、「情緒的消耗」と「コミュニケーションの低減」に関する得点が有意に高いことを明らかにした。

しかし、これらの研究は、途中退部者のみに焦点をあてており、また運動部非継続者が途中退部なのか高校入学時点で部活動に加入しないのかを明確にしていない。さらに、高校で運動部活動を継続する場合でも、中学と同じスポーツを継続している場合と他のスポーツに変更したことがある。池上（2005）は、種目を変更した理由として最も多かったのは「やったことがないから」（68%）であることを明らかにし、小・中学校で経験したことのない種目に惹かれたと考察している。

このように、運動部活動の継続・非継続の理由は全体的には示されているが、陸上競技に焦点をあてた研究は見当たらない。日本陸上競技連盟（2016）は、中学 3 年の登録者数は約 57,000 人であるが、

高校でも陸上競技を継続する者は、男子で 38.5%、女子で 30.5%であることを示した。別な言い方をすれば、高校でも陸上競技を継続しない者は男子で 61.5%、女子で 69.5%であることから、毎年 30,000 人以上の者が中学までで陸上競技を辞めているということになる。高校まで陸上競技を継続することは、将来の健康だけでなく、タレント選手の発掘につながる可能性がある。日本代表選手を対象にして青少年期の競技レベルを調査した研究によると、中学時に全国大会に出場していた者は全体の約 40%であったが、高校では約 80%が全国大会に出場し、その半数以上が全国大会で入賞以上の成績を収めていることを報告している（渡邊ら 2013）。このように、日本代表選手のうち、中学で全国レベルに至った者は半数以下なのである。つまり、中学までで競技を辞めないで高校まで競技を続けることが、タレント選手の発掘にとって重要なのである。そこで本研究は、中学校で陸上競技に中心的に取り組んでいた高校生を対象にして、中学校からの陸上競技の継続、他の活動への変更、途中退部、中止に関係する要因を明らかにする。

II 方法

1. 対象と調査内容

茨城県の全日制高等学校に通う高校 2 年生を対象にして、高校における部活動の継続・変更・中止に関する質問紙調査を実施した。質問紙は先行研究（青木 1989；稲地・千駄 1992；横田 2002）を参考にし、生年月日、性別、中心的に実施していた学外活動、最高成績、家族の支援等を尋ねた。高校における同一活動の継続・非継続については、非継続のパターンには、他の活動への変更、途中退部、入学当初から取り組んでいない（中止）が想定されたため、同一活動の継続を含めて 4 択で尋ねた。途中退部の場合、どのような活動に取り組んでいたのかは尋ねていなかった。その後、継続・非継続の理由等を最大で 3 つまで尋ねた。使用した質問紙は付録 1 に示した。

調査を実施するにあたって、茨城県高校体育連盟評議員会（2016 年 4 月開催）において、各学校の代表者に調査の概要を説明した。その後、対象人数分の質問紙を各学校長宛てに依頼文とともに郵送した。その際、2016 年 6 月末を返信の期限とした返信用封筒を同封して早期の返信を促した。最終的には、120 校中 98 校（82%）からの返信があり、19843 名の回答を得た（2016 年 7 月末）。データの入力の後、中学時に陸上競技を中心的に行なってい

表1 継続・非継続者の人数と割合

	男子(298名)		女子(335名)	
	人数	割合	人数	割合
継続	141	47.3	101	30.2
変更	65	21.8	131	39.1
途中退部	26	8.7	40	11.9
中止	66	22.2	63	18.8

未記入者:4名

た者を精査したところ 638 名が対象として抽出された。なお、本研究は茨城大学教育学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

2. 統計分析

中学校からの継続・非継続および高校からの開始理由については、男女別に単純集計して選択された理由の割合を示した。継続・非継続と誕生日、中学時の最高成績、家族の支援との関係についてはクロス集計し、 χ^2 検定を用いて割合の差を検定した。統計処理には JMP8.0 (SAS Institute Inc.) を用い、有意水準は $\alpha = 0.05$ とした。

III 結果

1. 陸上競技を継続する理由と辞める理由

表1には、中学校時に陸上競技を実施していた者のうち、高校でも継続している者と継続しなかった者の人数と割合を男女別で示した。637名中4名は継続・非継続が未記入であったため除外し、633名を分析の対象とした。陸上競技を継続した者は、男子が47.3%、女子が30.2%であった。

図1～4には、陸上競技の継続・非継続の理由を示した。図には選択割合が3%以上の項目を示した。

高校でも陸上競技を継続した理由で際立って多かったのは、男女とも「自分の技能や競技成績を伸ばしたい」、「そのスポーツや活動をするのが好き」で、この2項目を60%以上の者が選択していた(図1)。

他の活動に変更した理由で多かったのは、男女とも「新しい活動に挑戦したい」、「楽しそう」が30%以上で上位を占めた。3位以降の順番は、性差はあるが、10%以上を占めた項目の中で、「先輩や友達に誘われて」、「やりたかったが中学でその活動がなかった」、「自分の能力に限界を感じた」が共通していた。一方、男子で「掛け持ちで出場して良い成績を残した」、「高校の指導者に誘われて」、女子で「中学の時の練習などがつらかった」、「中学の時の活動に十分満足した」が10%以上を占めていた

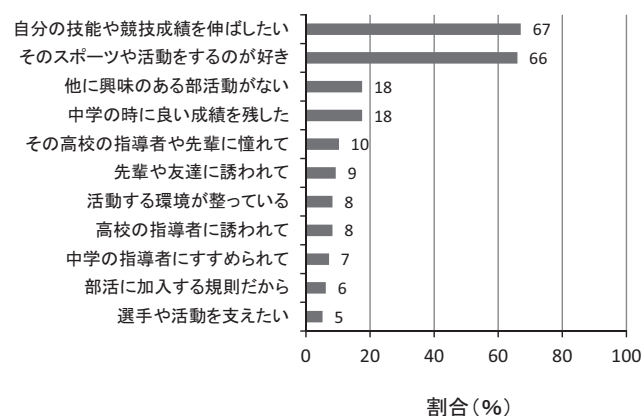
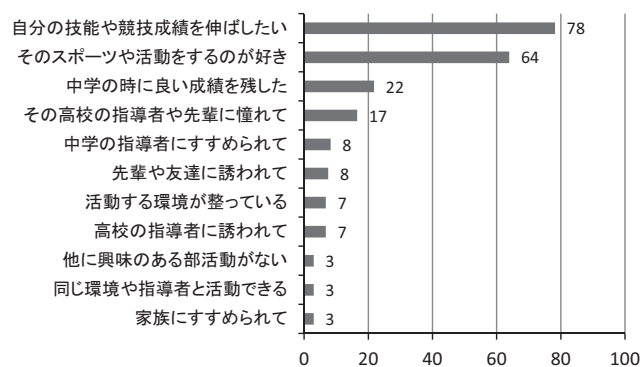


図1 陸上競技を継続した理由
(上図：男子，下図：女子)

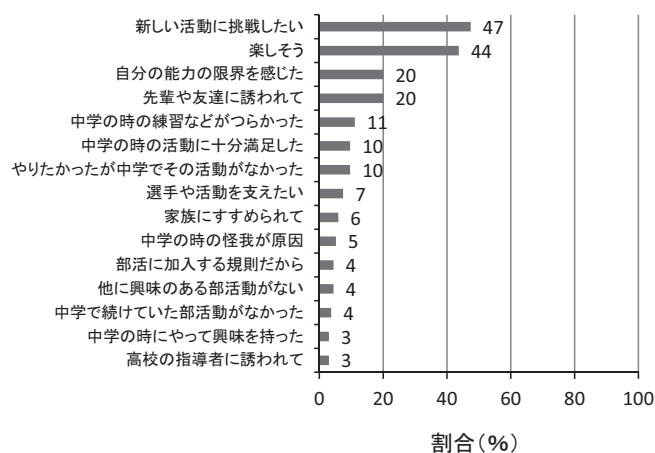
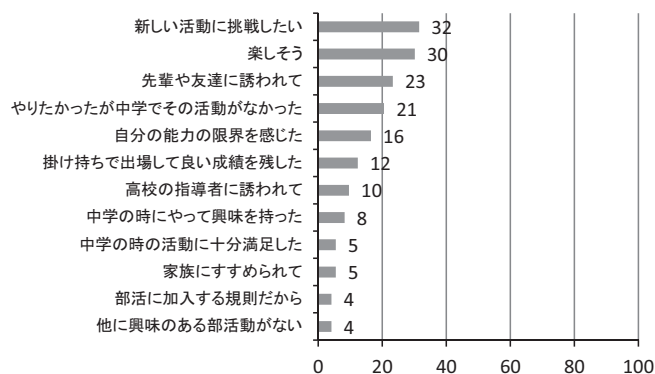


図2 他の活動に変更した理由
(上図：男子，下図：女子)

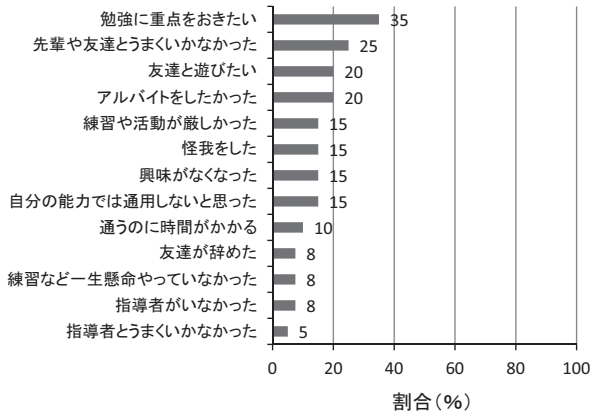
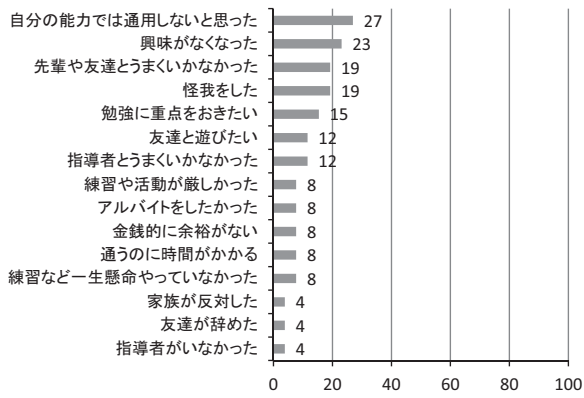


図3 途中退部した理由
(上図：男子，下図：女子)

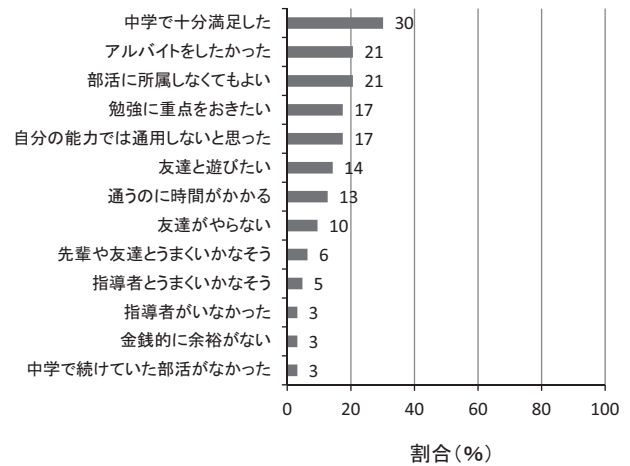
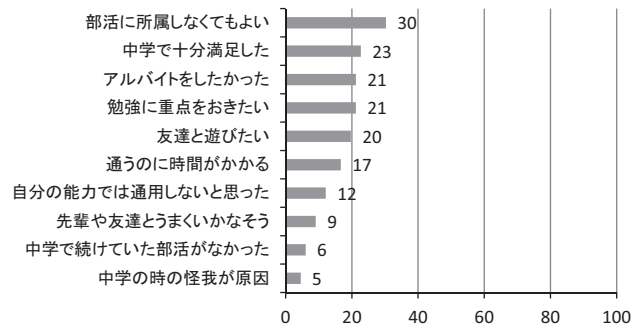


図4 高校入学当初から部活動に取り組まなかった理由 (上図：男子，下図：女子)

(図2)．高校から変更した活動は表2の通りである。

途中退部した理由では，男子では「自分の能力では通用しなかった」，「興味がなくなった」，「先輩や友達とうまくいかなかった」，「怪我をした」，女子では「勉強に重点をおきたい」，「先輩や友達とうまくいかなかった」，「友達と遊びたい」，「アルバイトをしたかった」が上位を占めた (図3)。

高校入学当初から部活動に取り組まなかった理由では，男女で順序は異なるものの，「部活に所属しなくてもよい」，「中学で十分に満足した」，「アルバイトをしたかった」，「勉強に重点をおきたい」が4位以内を占めた (図4)。

2. 誕生日と継続・非継続との関係

表3には誕生日と継続・非継続との関係を示した。誕生日カテゴリ内での継続，変更，途中退部，中止者の割合を示した。 χ^2 検定の結果，誕生日の分布の割合に有意差は認められなかった。しかし，全体的にみて継続者は学年の前半(4～9月)に誕生している割合が高い傾向があった。

3. 中学時の競技成績と継続・非継続との関係

図5には，中学時の競技成績別に継続，変更，途

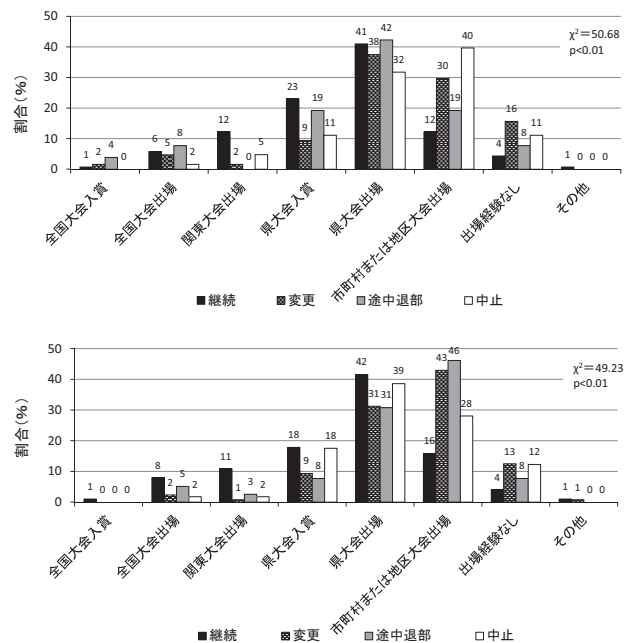


図5 中学時の競技成績と継続・非継続の割合
(上図：男子，下図；女子)

中退部，中止者の割合を示した。男女とも，「県大会入賞」以上の競技成績では，継続者の割合が最も高かった。一方，「市町村または地区大会出場」レベルでは，継続者の割合が最も低かった。「県大会

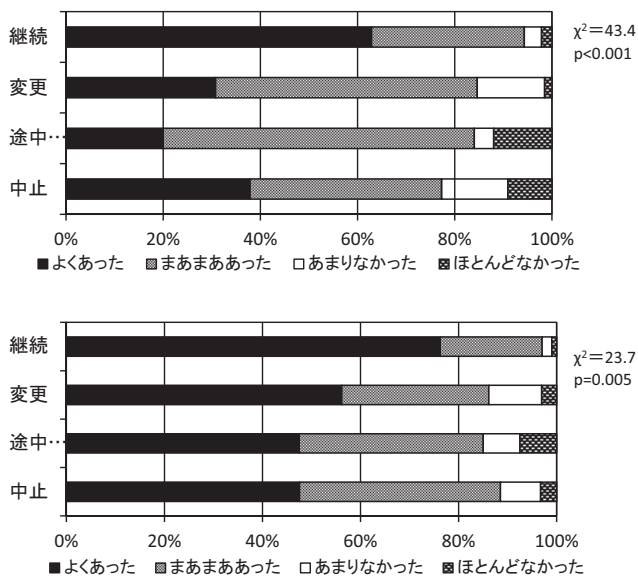


図6 家族の支援と継続・非継続との関係
(上図：男子，下図：女子)

出場」レベルでは，継続者も非継続者も31～42%を占めており，全体的に高い傾向であった。

4. 家族の支援と継続・非継続との関係

図6には，継続，変更，途中退部，中止者別にみた，家族からの支援の程度を割合で示した。選択項目の分布には男女とも有意差が認められた。継続者は非継続者よりも家族からの支援が「よくあった」と選択する者の割合が高く，男子で60%，女子で70%以上であった。

IV 考察

本研究は，中学で陸上競技を中心的に実施していた者を対象にして質問紙調査を実施し，高校における陸上競技の継続・非継続の理由に加えて，誕生日，中学時の競技実績，家族の支援との関係を明らかにした。

本研究は茨城県の高校生を対象にしている。平成26年における日本中学校体育連盟(2014)に登録されている茨城県の陸上部員数は2912名で全国23位であった。一方，中学校の陸上部設置率は32.9%で全国45位，中学校での陸上部員の占める割合は4.9%で全国46位であった。このように，茨城県は中学校の陸上部および部員の占める割合が非常に小さい県であることから，本研究の結果が全国的な傾向を反映しているのかどうかはわからない。

1. 陸上競技の継続に関する要因

陸上競技を継続した理由として，際立って高い割合を示した項目は，男女とも「自分の技能や競技成績を伸ばしたい」，「そのスポーツや活動が好き」であった。選択割合は下がるが，「中学の時に良い成績を残した」，「その高校の指導者や先輩に憧れて」(男子)，「他に興味のある部活動がない」(女子)という項目も上位にあることから，継続している者は向上心が強いとともに，陸上競技への好意度が高いことが窺える。

そのような回答結果の背景には，中学校期での競技成績が影響している可能性が高い。図5をみると，「県大会入賞以上」レベルの者は，非継続者に比べて高い確率で陸上競技を継続している一方で，「市町村または地区大会出場」レベルの者は継続しない割合が高い。これは，青木(1989)と池上(2005)が報告した，「レギュラーであること」や「規模の大きな大会への出場経験があること」は運動継続と関連するという結果と近似する。

「県大会出場レベル」は，継続者・非継続者ともに多い傾向ではあるが，市町村や地区大会レベルで終わらず，県大会というステージに進めさせてあげることが，継続を高める方策となるかもしれない。例えば，県大会への標準記録を引き下げたり，通信大会や総体での種目数を増やすことがアイデアとして挙げられる。実際に，石川県では総体に3000m競歩，近畿地方では円盤投げ，近畿・四国・九州地方では男子三段跳，鳥取県・沖縄県ではジャベリックスローなど，全日中になく種目を県大会からブロック大会レベルで開催している。

2. 陸上競技の非継続に関する要因

陸上競技を継続しない場合，①他の活動に変更，②途中退部，③入学当初から取り組まない(中止)の3パターンが考えられた。ここでは3つの観点から理由と要因を考察する。

2-1. 陸上競技から他の活動への変更

他の活動に変更した理由で割合が高かったのは「新しい活動に挑戦したい」と「楽しそう」で，女子の方が高い値を示した。また，「先輩や友達に誘われて」という項目も上位にあることから，周囲の影響を受けながら，他の活動に魅力を感じて陸上競技から変更したものと思われる。

ネガティブな理由で10%以上の割合を占める項目もあった。「自分の能力の限界を感じた」は男子で16%，女子で20%を占めていた。これは競技成績が関係していると考えられる。「やりたかったが

中学でその活動がなかった」という項目も男子で21%、女子で10%を占めていたことから、中学校で陸上競技を実施することが本望でなかった者も存在していることがわかる。高校から始めた活動をみると、バドミントン、弓道、ダンス、硬式テニスといった、中学校の部活動としては少ないスポーツが目立っていた(表2)。これは、高校で部活動種目を変更した者は、小学校や中学校で経験したことの少ないスポーツに移る傾向があるという池上(2005)の結果とほぼ一致する。

中学校での部活動の過熱が指摘されている現在、過度な練習や長時間の練習の結果、その活動を辞めてしまう可能性、つまり“燃え尽き”で陸上競技を辞めてしまうことが予想された。活動を変更した者のうち、「中学の時の練習などがつらかった」、「中学の時の活動に十分満足した」という回答をした者は、男子では5%以下だったが、女子では10～11%であった。日常の練習に対する負担の受け止め方に性差があり、特に女子に対しての指導者の関わり方は工夫しなければならないだろう。

2-2. 途中退部

途中退部した理由は、男女でやや異なる結果となった。「先輩や友達とうまくいかなかった」を回答した割合が男子で23%、女子で25%と共通して上位に位置していた。先行研究でも途中退部の理由として「人間関係のあつれき」を挙げている(青木, 1989)。このように、途中で退部させないためには、部やクラブ内での人間関係が大切であることがわかる。指導者は、種目のコーチングだけでなく生徒同士の人間関係についても把握しておかなければならないのかもしれない。

男子で最も回答割合が多かったのは「自分の能力では通用しないと思った」であった。高校に入学して陸上競技または他の活動に取り組んだが、周り自分自身の実力差を感じたと思われる。今回の調査対象は高校2年生であることから、入部して1年以内で退部していることになる。その時点で体格的にも体力的にも上級生には及ばないし、今後のトレーニングで実力を高めることは可能なはずである。指導者は選手に対して、自分自身の可能性を信じさせる配慮が必要であろう。

一方、女子では、「勉強に重点をおきたい」の回答割合が最も多かった。青木(1989)の報告では、男子のみであったので、本研究と結果が異なる。原因は不明であるが、時代背景が関係しているのかもしれない。男子でも15%の回答割合があることから、両性とも影響は大きいと言えよう。特に進学校では、

表2 高校で変更した部活動

男子			女子		
部活動名	人数	割合	種目名	人数	割合
バドミントン	7	10.8	ダンス	12	9.2
弓道	6	9.2	硬式テニス	10	7.6
バレーボール	5	7.7	バドミントン	9	6.9
サッカー	5	7.7	バスケットボール	7	5.3
硬式テニス	4	6.2			
バスケットボール	4	6.2			
ラグビー	4	6.2			

選択割合が5%以上の種目を表示
マネージャーを含む

大学進学に向けて勉強に費やす時間が多くなる。学校での課外授業や宿題、テストも頻繁に実施される高校もある。当初は部活動と両立を考えていたと思うが、困難と感じて部活動を辞めたものと思われる。

2-3. 入学当初から取り組まない(中止)

男子で最も回答割合が高かったのは、「部活動に所属しなくてもよい」(30%)で、「中学で十分満足した」(23%)と続いた。中学時の競技成績をみると、男子では「市町村または地区大会出場」レベルが40%と最も高い。「出場経験なし」も含めると51%にもものぼる。このように中止した者の競技成績の低さが目立つが、「自分の能力では通用しないと思った」という回答割合は低い(12%)ことから、劣等感が理由で中止する割合はあまり高くないと思われる。中学校の部活動参加は義務感が強く、高校ではその強制力が低い傾向がある。高校で中止する者の30%ほどは、中学の時点ですでに部活動に取り組むことに消極的だったのかもしれない。

女子で最も回答割合が高かったのは「中学で十分満足した」であった(30%)。中学時の競技成績をみると、「県大会出場」が最も高く(39%)、次に「市町村または地区大会出場」が続いて(28%)、男子と異なる傾向を示した。「県大会入賞」で中止している者の割合も男子より高いことから、中学で十分な達成感を感じてしまったものと思われる。

「アルバイトをしたかった」と「勉強に重点をおきたい」も回答割合が高かった。「経済的に余裕がない」という回答割合が低いことから、アルバイトをするのは、家庭の経済的な理由ではないことがわかる。アルバイトを通して交友関係を広げたり、稼いだ給料を自由に使うことに、陸上競技を続けることよりも魅力を感じていたものと思われる。一方で、「勉強に重点をおきたい」の割合も高いが、これは学校の特徴によると思われる。途中退部した者と同様に、特に進学校では、大学進学に向けて勉強に費やす時間が多くなる。入学時のオリエンテーションで部活動との両立を諦めたものと思われる。

表3 誕生月と継続・非継続との関係

	男子				女子			
	継続	変更	途中退部	中止	継続	変更	途中退部	中止
4～6月生	30.5	24.1	29.1	16.3	31.0	25.0	24.0	20.0
7～9月生	29.2	26.2	18.5	26.2	29.5	32.6	21.7	16.3
10～12月生	28.6	20.5	34.6	24.6	24.0	21.8	12.5	24.2
1～3月生	16.5	24.7	19.2	27.7	18.8	17.3	22.5	19.4
χ^2 検定	$\chi^2=7.65, p=0.570$				$\chi^2=5.04, p=0.831$			

数値は割合(%)である。

4月1日生の者は1～3月生区分に含めた

3. 誕生月と継続・非継続との関係

競技成績に影響する要因として、練習環境や指導者や仲間の存在が挙げられるが、その他の要因の一つとして誕生月の影響(相対的年齢効果)も無視できない。全日中大会に出場した者のうち、4～6月生まれは40%であるのに対して1～3月生まれの者は、13%であった(日本陸上競技連盟 2016)。学年前半に誕生した者は後半の者に比べて成長期間が長いことから、体格や体力に優れる傾向にあることは容易に想像がつく。そのような利点もあり、学年前半に生まれた者は高い競技成績を収めやすいと考えられる。しかし陸上競技の継続・非継続に関しては、一定の傾向を確認しにくい(表3)。継続者に着目すると、学年の前半に誕生した者の割合は後半に誕生した者よりも高いが、非継続者ではその逆を示していない。相対的年齢効果は陸上競技を継続する点で重要な要因となる可能性があるが、非継続の理由としては十分でないようである。

4. 家族の支援と継続・非継続との関係

継続者は、家族からの支援が「よくあった」と回答する割合が高かった。その背景には高い競技成績が関係している可能性がある。しかし、高い競技成績を獲得したことで家族の支援が積極的になったのか、家族の支援が積極的だったから高い競技成績につながったのか、その因果関係はここでは不明である。同様に、支援の内容についても尋ねていないので詳細は不明である。いずれにしても、家族の積極的な支援があったことは確かである。

非継続者で、家族の支援が「よくあった」と回答する者は男子で約20～40%、女子で約50%と性差があった。特に女子は家族の支援が「よくあった」と回答する者の割合が約50%であったにも関わらず、陸上継続する割合が男子よりも低い(表1)。家族の支援の仕方の違いも関係している可能性があるため、今後、詳しく調査する必要があるだろう。

VI まとめ

本研究は、高校生における陸上競技の継続・非継続の要因を明らかにした。対象は茨城県の全日制高校に通う2年生で、部活動の継続・非継続に関する質問紙調査を実施した。82%の高校から返信があり、19843名の回答を得た。そのうち、中学校で陸上部に所属していた633名を分析対象とした。得られた結果を以下に示す。

1. 高校で陸上競技を継続している者は、向上心が強く、陸上競技への好意度が高い傾向であった。その背景には、高い競技成績、相対的年齢効果、家族の積極的な支援が関係していた。
2. 陸上競技から他の活動に変更した者は、他のスポーツに魅力を感じる傾向で、その背景には先輩や友達の誘いや自分自身の能力の限界を感じていた。女子においては練習の厳しさも関係していた。
3. 陸上競技にかかわらず途中で退部した者は、人間関係のあつれきだけでなく、自分自身の能力の限界を感じたことや勉強との両立困難が関係していた。
4. 入学当初から取り組まなかった者は、部活動に所属することに興味がなかったり、中学に十分な達成感を感じていたこと、アルバイトなど他の活動に魅力を感じている傾向であった。

文献

- 青木邦男(1989) 高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因. 体育学研究, 34: 89-100.
- 池上寿伸(2005) 運動部活動における継続性に関する研究. 佐賀大学文化教育学部研究論文集, 9: 223-236.
- 稲地裕昭, 千駄忠至(1992) 中学生の運動部活動における退部に関する研究～退部因子の抽出と退部予測尺度の作成. 体育学研究, 37: 55-68.

- 文部科学省 (2010) 平成 22 年度体力・運動能力調査報告書. http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/tairyoku/kekka/k_detail/1311808.htm (参照日: 2017 年 3 月 7 日)
- 日本中学校体育連盟 (2014) 平成 26 年度加盟校調査集計表. <http://www.njpa.sakura.ne.jp/kamei.html> (参照日: 2017 年 1 月 29 日)
- 日本陸上競技連盟 (2016) トップアスリートへの道～タレントトランスファーガイド～. <http://www.jaaf.or.jp/athleticclub/transferguide.pdf> (参照日: 2017 年 1 月 29 日)
- 笹川スポーツ財団 (2015) 青少年のスポーツライフデーター 10 代のスポーツライフに関する調査報告書ー. 61 - 67.
- 横田匡俊 (2002) 運動部活動の継続及び途中退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動. 体育学研究, 47: 427 - 437.
- 渡邊將司, 森丘保典, 伊藤静夫, 三宅 聡, 森 泰夫, 繁田 進, 尾縣 貢 (2013) オリンピック・世界選手権代表選手における青少年期の競技レベルー日本代表選手に対する軌跡調査ー. 陸上競技研究紀要, 9: 1 - 6.

高校における部活動の継続，変更，中止に関するアンケートのお願い

茨城県において部活動の加入率は中学から高校にかけて低下しますが，その原因については明らかになっていません。そこで今回，高校における部活動の継続，変更，中止に関する理由を明らかにし，中学や高校での部活動の在り方について考えていきたいと思っています。ご協力いただけますようお願い致します。

以下の質問について，当てはまるものの番号に○をつけてください。当てはまらない質問がある場合には次に進んでください。

問 1. 生年月日を教えてください。(平成 年 月 日生まれ)

問 2. 性別を教えてください。(①男 ・ ②女)

問 3. 運動やスポーツをすることは好きですか。(①好き ②まあまあ好き ③あまり好きではない ④嫌い)

問 4. 自分自身の運動能力についてどう思いますか。

(①高いと思う ②やや高いと思う ③やや低いと思う ④低いと思う)

問 5. 中学の時，部活動（学校の運動部または文化部）に所属していましたか。

(①所属していた ②所属していたがほとんど参加しなかった ③途中で辞めた ④所属していなかった)

問 6. 中学の時，部活動よりも力を入れていた学外活動（学校ではないクラブスポーツや習い事）はありますか？

(①ある ・ ②ない) *習い事に学習塾は含みません

問 7. 中学の時の部活動または学外活動のうち，中心的に実施していた活動 1つに○を付けてください。

- ①陸上競技 ②バレーボール ③軟式野球 ④サッカー ⑤ソフトテニス ⑥バスケットボール
 ⑦ハンドボール ⑧ソフトボール ⑨卓球 ⑩剣道 ⑪柔道 ⑫バドミントン
 ⑬弓道 ⑭水泳 ⑮体操競技 ⑯空手道 ⑰硬式テニス ⑱硬式野球 ⑲吹奏楽
 ⑳美術 ㉑書道 ㉒合唱 ㉓パソコン ㉔ピアノ ㉕その他 ()

問 8. 中学の時，中心的に実施していた部活動または学外活動の最高成績 1つに○を教えてください。

- ①国際大会出場（日本代表レベル） ②全国大会上位入賞（おおよそ全国 4 位以上）
 ③全国大会入賞（おおよそ全国 8 位以上） ④全国大会出場
 ⑤関東大会出場 ⑥県大会入賞（おおよそ 8 位以上） ⑦県大会出場
 ⑧市町村または地区大会出場 ⑨出場や発表などの経験なし ⑩その他 ()

問 9. 中学の時の部活動や学外活動でのあなたの役割（種目，ポジション，パートなど）を教えてください。役割が複数ある場合は，中心的に行なっていた順に左から記述してください。

()

問 10. 中学の時の部活動や学外活動でのあなたの立場について，当てはまるもの 1つに○を付けてください。

- ①運動部では正選手・文化部ではコンクールなどの代表またはメンバーだった（ほぼ毎回選出）
 ②正選手・代表・メンバーになったりならなかったり（半々くらいで選出）
 ③ほとんど正選手・代表・メンバーにならなかった（選ばれても 1～2 回程度）

問 11. 中学の時，あなたが部活動や学外活動に取り組むにあたって，家族の応援や励ましはありましたか。

(①よくあった ②まあまああった ③あまりなかった ④ほとんどなかった)

付録 1 のつづき

問 12. **高校での部活動や学外活動への取り組みについて、当てはまるもの 1 つに○を付けてください。**

- ①中学と同じスポーツや活動を、高校でも継続している（軟式野球から硬式野球、ソフトテニスから硬式テニスなどを含む）
- ②高校では中学と違うスポーツや活動に、変更して実施している（中学は無所属で高校から所属した者などを含む）
- ③高校では部活動や学外活動を途中で辞めてしまって、今は特に何も取り組んでいない
- ④高校入学当初から、部活動や学外活動に取り組んでいない

問 13. **問 12 で①(中学と同じ活動を継続)を選択した方への質問です。その理由を下の枠から 3 つまで選んでください（3 つない場合は 1 つや 2 つでもかまいません）。**

- ①自分の技能や競技成績を伸ばしたい
- ②そのスポーツや活動をするのが好き
- ③中学の時に良い成績を残した
- ④中学の指導者にすすめられて
- ⑤高校の指導者に誘われて
- ⑥先輩や友達に誘われて
- ⑦家族にすすめられて
- ⑧その高校の指導者や先輩に憧れていた
- ⑨同じ環境や同じ指導者と活動できる
- ⑩活動する環境が整っている
- ⑪他に興味のある部活動がない
- ⑫部活に加入する規則だから
- ⑬選手や活動を支えたい
- ⑭その他（ ）

問 14. **問 12 で②(中学と異なる活動に変更)を選択した方への質問です。その理由を下の枠から 3 つまで選んでください（3 つない場合は 1 つまたは 2 つでもかまいません）。**

- ①やりたかったが中学でその部や活動がなかった
- ②中学の時に掛け持ちで試合に出場して良い成績を残した
- ③中学の指導者のすすめ
- ④高校の指導者に誘われて
- ⑤先輩や友達に誘われて
- ⑥家族にすすめられて
- ⑦中学と同じ部活動をやりたかったが指導者がいなかった
- ⑧中学の活動に自分の能力の限界を感じた
- ⑨中学の時の練習などがつらかった
- ⑩中学で続けていた部活動がなかった
- ⑪楽しそう
- ⑫新しい活動に挑戦したい
- ⑬中学の時の活動に十分満足した
- ⑭他に興味のある部活動がない
- ⑮中学の時にやって興味を持った
- ⑯部活に加入する規則だから
- ⑰選手や活動を支えたい
- ⑱中学の時の怪我が原因
- ⑲その他（ ）

問 15. **問 12 で③(途中で辞めた)を選択した方への質問です。その理由を下の枠から 3 つまで選んでください（3 つない場合は 1 つまたは 2 つでもかまいません）。**

- ①指導者がいなかった
- ②部が練習など一生懸命やっていなかった
- ③自分の能力では通用しなかった
- ④勉強に重点をおきたい
- ⑤通うのに時間がかかる
- ⑥金銭的に余裕がない
- ⑦友達が辞めた
- ⑧家族が反対した
- ⑨興味がなくなった
- ⑩怪我をした
- ⑪指導者とうまくいかなかった
- ⑫アルバイトをしたかった
- ⑬友達と遊びたい
- ⑭先輩や友達とうまくいかなかった
- ⑮練習や活動が厳しかった
- ⑯その他（ ）

問 16. **問 12 で④(高校入学当初から取り組んでいない)を選択した方への質問です。その理由を下の枠から 3 つまで選んでください（3 つない場合は 1 つまたは 2 つでもかまいません）。**

- ①中学で十分満足した
- ②中学で続けていた部活がなかった
- ③自分の能力では通用しなかった
- ④友達と遊びたい
- ⑤勉強に重点をおきたい
- ⑥通うのに時間がかかる
- ⑦金銭的に余裕がない
- ⑧部活に所属しなくてもよい
- ⑨指導者とうまくいかなそう
- ⑩先輩や友達とうまくいかなそう
- ⑪アルバイトをしたかった
- ⑫指導者がいなかった
- ⑬友達がやらない
- ⑭家族が反対した
- ⑮中学の時の怪我が原因
- ⑯その他（ ）

問 17. **高校で部活動か学外活動に取り組んでいる方は、中心的に実施している活動 1 つに○を付けてください。**

- ①陸上競技
- ②バレーボール
- ③軟式野球
- ④サッカー
- ⑤ソフトテニス
- ⑥バスケットボール
- ⑦ハンドボール
- ⑧ソフトボール
- ⑨卓球
- ⑩剣道
- ⑪柔道
- ⑫バドミントン
- ⑬弓道
- ⑭水泳
- ⑮体操競技
- ⑯空手道
- ⑰硬式テニス
- ⑱硬式野球
- ⑲吹奏楽
- ⑳美術
- ㉑書道
- ㉒合唱
- ㉓パソコン
- ㉔ピアノ
- ㉕その他（ ）

問 18. **問 17 で選んだ活動は、主にどちらですか。（①学校の部活動 ②学外のクラブ等）**

問 19. **問 17 で選んだ活動の役割を教えてください。**

- ①選手・制作者・奏者など、自分自身が活動者である（種目やポジションなど： ）
- ②マネージャーや補助者など、活動する人を支えている